

若手教員 指導力磨く

団塊世代の教員の大量退職で新規採用が増え、経験年数の浅い若年教員が全国的に増えているのを受け、善通寺市教委は若手教員の指導力や資質の向上を図る取り組みを始めた。初回の研修会を23日、同市文京町の旧善通寺偕行社で実施。日本サービスマナー協会講師の内海加奈子さんを招き、豊かな人間性や社会性を身に付ける大切さに理解を深めてもらう内容で51人が参加した。

市教委によると、市内の小中学校現場では、20〜30代で在職5年未満の教員の割合が約3割。今後とも増加傾向で、「教員の指導力は現場での実践とともに、モデルとなる先輩教員の指導方法を学び取ることで高められてきたが、現在の年齢構成では難しくなってきた」という。

そこで、研修などにより指導力不足の解消やベテラン教員のノウハウの継承などを図り、若手教員の育成に取り組む。数年後には、学校運営の中での責任も増えることから、その自覚も

善通寺市教委が研修会 初回は表情づくり学ぶ

促す。

初回の研修会では、内海さんが表情や身だしなみ、立ち振る舞いなどの重要性を解説しながら「親近感、共感性、受容性。この三つがそろっていないと、保護者に『子どもものに気がついてくれないのでは』と不満や不信感を与える」と強調した。また、キャンビンアテンダントを例に挙げて、「相談しやすい環境をつくるのが大事。日々の生活から意識して、子どもや保護者、教員同士でもキャンビンアテンダントのような表情で返事ができれば」と語った。

研修会は今後、専門家を交えて年5回程度の開催を予定しており、次回からは若手の市職員も参加する。

市教委は「若手教員には新しいものを取り込み、コミュニケーション力や同僚とチームで対応する力、地域内の多様な組織などと連携できる力を培ってほしい」としている。

若手教員の指導力向上を目指して行われた研修会
—善通寺市文京町、旧善通寺偕行社

